

# 若者の死生観

——日本人大学生が抱く死と死後のイメージ——

伊 藤 雅 之

## 1 はじめに

本稿は、日本人の若者が抱く死や死後のイメージを手がかりとして、現代日本の宗教的世界観、とりわけ死生観のゆくえを読み解こうとするものである<sup>1)</sup>。死は人生における最も重要な出来事の1つであり、生きる意味を考える契機ともなりうる。また、他者の死に直面することは、自分の死すべき運命を自覚したり、各文化圏に浸透している宗教的世界観がたち現れる出来事となる可能性もある。

現代日本社会では、ガン告知、死別体験、葬送儀礼など、おもに中高年層が直面する死にかかわる問題について活発な議論がおこなわれてきている(池周1992, 加藤2001, 澤井2000)。また、若者の宗教意識にかんしては、「宗教と社会」学会の宗教意識プロジェクトが1万人を超える大学生へのアンケート調査を実施しており、霊魂の存在や死後の世界を信じる人たちの割合(約5割)についても貴重な報告がされている(井上2002)。しかしながら、若者がもつ霊界や死後の世界の具体的なイメージ、亡くなった近親者とのかかわり方についてなど、当事者の感じ方、考え方にかかわる死の文化的意味をめぐっての研究はほとんど存在しない。多くの伝統宗教の存在意義となっていた死への意味づけは、現代日本社会においてどのようにおこなわれているのだろうか。それは現代の若者の生き方とどのように関わっているのだろうか。これらの問いを本研究の主要関心とした。

## 2 調査方法

本研究にかかわる調査は、一方で若者の生と死のイメージの形成を理解する一環として、他方では各世代や諸外国の死生観と比較するデータを提示するための第一段階と位置づけている。今後の継続調査においては、ほかの世代(中年, 高齢者)や諸外国の状況を把握し、それぞれの死生観を通時的、共時的に比較検討していく予定である。

今回の調査では、筆者の勤務する愛知学院大学文学部国際文化学科において、18歳から22歳の大学生を対象として、死や死後のイメージに関するアンケートとインタビューを実施した。アンケート(2002年5月, 約90名の学生を対象に実施)では、1)人間が死んだ後の世界についてのイメージ、および、2)数年以内に亡くなった近親者とその死因について質問し、記述式の回答をえた。つぎに、アンケート対象者のなかで過去に近親者を亡くした経験をもつ学生15名を選び、インタビューをおこなった(2002年6月, 7月)。インタビューは、各インフォーマントに1時間半から2時間おこない、生前の近親者とのかかわりや死の知らせを聞いた状況、葬式の様子、仏壇やお墓でのお参りの際の死者とのかかわり方などを詳細に聞き取りした。インタビューテープに録音した内容はすべて書きおこして分析を進めていった。本稿はその成果の一部である。なお、本文中の名前はすべて仮名である。

## 3 多様化する死後のイメージ

アンケートでは、男女約90名のうち8割以上

の人々は何らかの死後の世界を信じていることがわかった。しかし、約2割にあたる16名の学生は「死んだら何もなくなる」と回答している。この数字は、「宗教と社会」学会の宗教意識プロジェクトが学生に対しておこなった調査結果（死後を信じる人びとの割合は約5割）よりもかなり高くなっている（井上2002）。本調査では、限られたサンプルではあるが、記述式の回答から読み取れる若者の死生観の諸特徴をまとめてみたい。まずは、死後の世界を信じない2割の意見を紹介しよう。

何もかも無くなると思う。生まれ変わることも霊の世界に行くこともないと思う。これらは生きて人間がつくり出したものだと私は考えています。死後の世界や霊を恐れるのは死ぬことを恐れているだけで、その存在は幻想です。（矢野友美さん、22歳、女性）

矢野さんの回答は、かなり詳しい内容となっている。これ以外の人びとにおいては、「何もなくなる」「ないと思う」など短い回答がほとんどであったが、言わんとする内容は矢野さんの記述にあらわれていると思われる。

これに対して約8割の人たちが何らかの死後の世界を信じており、そのイメージは、1) 霊界や天国などのあの世に行く、2) 生まれ変わる、3) 霊界に行ったあと生まれ変わるといった1) 2) を組み合わせたものの3パターンに分けられることが明らかとなった。たとえば、死後の世界（において）は、「霊界は魂だけが存在する」、「人間の形をした者たちがいる」、「みんな白い服を着ている」、「生前の親しい人たちがともに暮らす」、「自分だけしかいない」、「一時的な修行の場である」、「みんな幸せに楽しく暮らしている」、「守護霊として自分たちを見守っている」など細かい点で相違があった。生まれ変わりについては、「霊界にとどまり生まれ変わらない」という意見から、「一部の人だけ生まれ変わる」、「前世と近い家族に生まれ変わる」、「人間に生まれ変わることはなく虫や動物になる」などいろいろなイメージが抱かれていた。

こうした死後に対する多様なイメージがあるの

は、現代日本社会では、1) 死や死後世界のイメージに関する（宗教教育、家庭のしつけなどによる）社会化がそれほど徹底していないこと、2) （インタビューで明らかとなったが）たとえ近親者が亡くなった場合でも死や死後について家族・友人と会話していない、またはきわめて限定された他者とのみ会話していること、そして3) さまざまなマスメディア（日本と海外の映画やドラマやオカルト番組、マンガなど）から影響を受けていることが関連している。社会化の不徹底、コミュニケーションの欠如、およびマスコミ情報の氾濫により、各個人が断片的な情報をつなぎ合わせて独自の死後イメージを構築しているのだと考えられる。

#### 4 若者の死生観の諸特徴

大学生に対するインタビューでは、近親者を亡くした者のみを対象とし、彼ら／彼女たちの具体的体験に基づく死生観の究明を試みた。聞き取り調査のデータを分析した結果、若者の死生観の特徴としてつぎの5点が浮かび上がってきた。インタビューの抜粋を引用しながらその具体的内容についてまとめてみたい。

##### (1) 死後のイメージの流動性

若者の死生観の第1の特徴に挙げられるのは、死後のイメージは漠然としており、語られる内容も流動的なことである。たとえば、アンケート実施時には「死んだら輪廻転生する」と回答していた女子学生が、数週間後のインタビューでは「死んだら何もなくなる。死後のイメージは人間の願望にすぎない」と答えたケースもあった。アンケート直前に「たまたま輪廻を扱ったテレビ番組をみた影響でそう回答した」とのことだった。また、別の男子学生は、霊界へ行く、生まれ変わる、何も無くなるという3つの死後のイメージを同時にもっているとのことであった。こうした死のイメージが流動的であったり、多層的であったりするの、3節で指摘した3つの要因に加え、当事者が死そのものを経験できないことに起因していると思われる。経験できない物事に対するイメージは想像にすぎず、その根拠が学校や家庭の教

育によって提示されない以上、流動的とならざるをえないだろう。

逆に、死にかかわる経験によって死後のイメージが変化する場合もある。親しかった祖父の死後、必死に心のなかでメッセージを送っても何も返事がこなかったという経験をもつ古沢琢磨君（20歳）は、いまでは「霊界や生まれ変わりを信じられなくなった」と現在の心境を語ってくれた。

同様に、以前は生まれ変わりを信じていた齋藤孝恵さん（19歳）は、最愛の祖母が亡くなったあと、その死生観が揺らぐことになる。以前の彼女は、近親者は死後に自分の身近な存在に生まれ変わると信じていたという。

（おばあちゃんは死んだあと）すごく近くにいるという感じはしないんです。……もし生まれ変わっていたら、ピンときそうじゃないですか。でも全然ないし……。生まれ変わってきてくれたとしたら、絶対何か知らせてくれる気がするけど、全然ないから、生まれ変わってないのかなって、最近と思います。

齋藤さんは、筆者とのインタビューの最中に、「私って鈍感なのかなあ」と祖母からのメッセージに気づかないだけの可能性に思いをめぐらせていた。だが、高校生のときまで信じていた生まれ変わりは、身近な他者の死によって失われつつあるようだ。

澤井（2000：27）は、「平均寿命が長く、少子化が進む現代において、祖父母と孫との関係は、比較的長期にわたり、また、場合によっては、4人の祖父母に孫1人といったような、濃密なものとなるだろう」と述べ、以前の平均寿命が短く子どもの数が多かった時代と比べ、現代では祖父母の死が孫たちにとってより重大な出来事として受け止められる可能性を指摘している。祖父母という近親者の死への直面によって、若者の従来の死後のイメージが揺らぐことは、ある意味現代的な現象なのかもしれない。

## （2）家族成員による死後のイメージへの影響

若者の死生観の第2の特徴は、死や死後のイメージ形成において家族成員の影響がきわめて大き

い点にある。死を本人が経験できず、また死について家族以外と話題にする機会がほとんどないため、家族の一言が絶対的な権威をもつのだと思われる。

たとえば、石井桂子さん（22歳）はアンケートにおいて、死後にも「魂が残ると思います。守護霊の存在は何となく信じているし、ゆう体離脱の体験もよく聞くからです。死んだ後は天国か地獄に行つて、運がよければ生まれ変わると思います。全然知らない人に生まれ変わるというより、自分のひ孫などに生まれ変わるような気がします」と明確なイメージを答えてくれた。彼女の死生観には、幼少期における家族との会話の影響がきわめて大きい。「弟が生まれたのが、母方のおじいちゃんが亡くなった後だったんですね。私が零歳11カ月の時に亡くなって、弟は1年もたたないうちに生まれたので、それでみんなが（おじいちゃんの）生まれ変わり、男の子だったから余計に生まれ変わりだって喜んだ」という。このような幼少期の家族からのメッセージは、彼女の死生観の形成に大きな役割を果たしているといえよう。

別の例を挙げよう。近藤由希子さん（21歳）は、人間は一度しか人間になることができず、その後は動物か植物に生まれ変わると信じている。それと同時に、人間の魂は空に浮かんでおり、子孫たちを見ていると語ってくれた。こうした死後のイメージには、祖母の影響が大きいようである。

何かよくおばあちゃんが、私がコオロギとか踏んだりすると、「ダメでしょ」とかって。「コオロギだって生きてるからダメよ」ってよく言われてて、「おじいちゃんの生まれ変わりかもしれないんだから」って。「じゃあ、生まれ変わるんだな、ふーん」って。おばあちゃんに何か教えられた気がする。

目に見えない、経験できない世界であるからこそ、身近な他者の一言は強い影響を与えるようである。

現代日本社会では、一般に死について語られる機会が少ない。その分、親族、とりわけ若者にと

っての祖父母などの年長者の考え方は揺るぎない権威、信頼すべき情報として社会化されていくのである。しかしながら、その権威づけは断片的で、世代間のつながりに欠けており、各家庭で一貫した死生観を共有しているわけではかならずしもない。たとえば、河合光司君（18歳）は、死後の世界については一切信じておらず、「ただ単に自分が生きてきた体がなくなるだけで、魂が現世に残るとか、そういったことはないんじゃないのかなあと思います」と答えてくれた。河合君はさらにつぎのように語る。

家族の中でも意見が分かれまして、僕みたいに死んだら何もなくなるっていう人もいれば、なかには死んだら生まれ変わって他のものとして生きるという考えの人もいます。お母さんは僕と同じ、死んだら何も無くなるという考え方で、お父さんは宗教とかにあまり興味がない人でそういったことも言わない人で、どちらかというとな今を大切にします人です。

興味深いのは、彼の亡くなった祖父は、浄土真宗高田派の僧侶であり、河合君の母親はその娘である点だ。輪廻転生や死後の世界の存在を前提とする仏教の僧侶の家族が死後の世界を否定するというのは、現代日本における死生観の永続性の欠如を如実に表しているといえるだろう。

### (3) 死別体験のタブー化

若者の死生観の第3の特徴は、若者にとって死について語る（質問する）ことはどことなくタブー視されていることにある。欧米における死のタブー化は、20世紀初頭、とくに第1次世界大戦以降に進行したと言われているが（Aries 1975=1983; Goerer 1965=1985）、この特徴は現代日本社会にも当てはまる。

たとえば横山雅子さん（22歳）は、中学1年生のときに母を亡くす経験をしている。彼女の母親（当時40歳）は風邪をこじらせて入院し、その数日後には原因不明のまま亡くなってしまう。しかし、母の死については誰とも話さなかったという。「(母のことは)言葉に出しにくかったです。おばあちゃんはよく思い出して一人で泣いて

ましたけど。お母さんの思い出話をするのもできなかったっていうか……。お父さんとも（4歳と9歳年下の）妹たちとも別にそういうのは話さないですね。」

中学生のときに母方の祖父を亡くした中村知子さん（21歳）も、死のことは誰とも話さなかったという。

（葬式や火葬場に行ったこととか、そういう一連のことについて、家族や友人と何か話した？）何も聞けなかったですね。「何で死んだの？」とも聞けなかったっていうか、何も聞いちゃいけないような気がして……。だから、曖昧なままなのかもしれない。そのおじいちゃんの病状も分からずに今までずっと育ててきたっていうのは、そのときお母さんに「何で死んだの？」ってちゃんと聞けなかったからだと思うんですよ。

（学校の友だちに対しても同じなのかな？）話してないです。うーん、何だろうな……。友だちに「こういうことがあって……」って話せるような話題ではないなって思ったんですよ。

以上の2例が示すように、死については、身近な他者の場合にはとくに話題に出づらいうように思われる。年長者からの積極的な説明がないかぎり、死についての話題を子どもの側から質問することはないといえよう。

澤井（2002）によれば、死のタブー化とは「死にゆく者や死別した者との『関係』の忌避」にある。彼は死別した者との関係では、「何を話したらよいかわからない」という当惑感を呼び起こす」と指摘する。その理由として、現代社会においては「悲しみを処理しうる『公的な』解釈図式、関係者の間で共有された『死の物語』が、そしてそれに付随する共有された行動様式がもはや存在しないからである」（2002：123）と論じる。こうした特徴は、筆者の事例においても当てはまったのである。一部の研究者（たとえば池周1992）は、現代日本社会が「死のタブー化からの解放」に向かっていると論じるが、それはあくまでも死と向き合う高齢者層の一般的動向であり、



近親者との死別の状況にある若者に関する限りそうした傾向は読み取れなかった。

#### (4) 親密な他者としての死者

インタビューにより明らかになった若者の死生観の第4の特徴は、死者に対する仏壇や墓でのお祈り／参りは、(浄土への往生と成仏を円滑にする) 供養の意味合いは薄れ、お参りをする当事者の悩みを報告したり願いを叶えてもらう機会となってきたことである。もちろん、従来より祖先は生存する人々を守護する働きがあるため、これを現代のみに特徴的な傾向とはいえない。しかし、先祖供養の意味合いが薄れてきていることは指摘できると思う。

たとえば小木曾由香さん(19歳)は、お盆の際には実家の近くにお墓参りに行き、また毎月の祖父の命日には家の仏壇にお参りして仏壇の横に手紙を置くという。「(手紙の内容は) どんなことがあったかとか、返事はないけど相談事を書いたり、家族の状況とかを生きている人に宛てているように手紙を書いています」と答えてくれた。また、一週間に2回くらい一人で墓参りに行くという小澤美香さん(21歳)にとっての墓参りは、自己開示できる親密な他者との交流のようである。「(墓参りは) 天気のいい日しか行かないからちょっと散歩のような気分で行くんですけど、何か話しかけちゃう、おじいちゃんに。何か言えない悩みとかを一人でしゃべってすっきりして帰って感じ」とのことだった。

墓参りの実践は、死後の世界を信じない人たちにおいても変わらず実践されていた。たとえば前出の矢野さんは、死後の世界を否定し、「大切な人が死んで、そしたらその人は天国で楽しくやっているとって思わないと、つらいというか、やってくれないってというのはあると思います」と語ってくれた。しかし、「ほんとに小さいときからお墓参り、当然のように行くんで。で、例えば受験だったら……『受かるようにお願いします』ってやりますね。お墓の向こうに先祖がいるとは思わないんですけど、とりあえず自分がどう思っているかを伝えます」と語ってくれた。

現代日本人の死生観は「多様な信念、均質的な

実践」として特徴づけられるかもしれない。死や死後のイメージは多様化し、細かいバリエーションが生まれている。しかしながら、たとえ「死んだら何もなくなる」と答えた人々でさえ、葬送儀礼や仏壇や墓でのお参りを実践しているのである。

#### (5) 他者の死と自己の日常の乖離

若者の死生観の第5の特徴は、若者にとって他者の死との直面は、自分の死すべき運命を自覚したり、そのことによって日常生活に亀裂をもたらすことがない点にある。もちろん、親しい人を喪失する体験はつらいものであるし、それに関連して相手の死後のゆくえについて考えたり、生前のかかわりを振り返る契機にはなっている。しかしながら、少なくとも若者にとって近親者の死は、バーガー(Berger 1967=1979)が指摘したような、またシッダールタの四門出遊の逸話が象徴するような、日常の自明な世界に亀裂を入れる出来事にはなっていなかったのである。

インタビューした学生のなかには、同年代の友人を交通事故で亡くした者やサークルの先輩が病気で亡くなった者もいた。しかし、自分と年齢の近い他者の死の体験を通じてすら、自分の死すべき運命と結びつけて考えることはしていない。これには、現代日本社会における「死の高齢偏在化」(野々山1996)が関連しているものと思われる。つまり、死者は、以前であれば特定の年齢層に限定されず、さまざまな年代の人びとに広がっており、それゆえ死後の生は人びとの重大関心事であったと考えられる(森岡1984)。ところが現在では、医療や衛生管理の発達によって平均寿命は延び(男性79歳、女性85歳)、死者は高齢者層に偏在している。こうした状況においては、死は人生の至るところにある身近な出来事ではなくなり、少なくとも若者にとってはあまりにも遠い未来の出来事であるといえよう。

## 5 おわりに

本稿では、アンケートとインタビューによってえられた若者の死生観の特徴をまとめてきた。これらの特徴をふまえ、冒頭の「死への意味づけ

は、現代社会においてどのようにおこなわれているのか」という問いに答えたい。現代では死への積極的な意味づけはおこなわれておらず、死後のイメージも多様化、断片化してきている。しかし、生や死の無意味化といったアノミー状態にあるとはいえ、個人によるオリジナルな死生観の構築がおこなわれているといえるだろう。少なくとも若者にとって死は遠い未来の出来事であり、近親者の死によって自分の生き方の基盤が揺らぐことはないと思われる。

今回の調査データから析出した若者の死生観の特徴は、どこまで現代日本人の幅広い世代の特徴として一般化できるだろうか。死後イメージの流動性、死別体験のタブー化、先祖供養の衰退はほかの年齢層にも妥当すると思われる。それでは、「他者の死と自己の日常の乖離」についてはどうだろうか。多くの人々が70歳以上まで生きる現在では、若者にとって死が遠い未来の出来事であることは理解できる。では、自分の親の死を看取り、自分の死がもう少し近い将来に見え得る中年層、あるいは自分自身の死がそれほど遠くない高齢者では、死や死後の世界のイメージはどのように異なるのだろうか。こうした年代では、身近な他者の死が自らの生き方を見つめ直す契機となっているのか。詳細な調査は今後の課題にしたい。

#### 注

- 1) 本稿に関わる基礎調査は2003年に完了し、その成果の一部は国際宗教社会学会（2004年7月イタリア・トリノ）、国際宗教史学会（2005年3月東京）において発表した。これに関わる論文としての公表が遅れていたが、ここに研究成果を報告するもので

ある。なお、本稿の本来は「続編」にあたる中高年層を対象とする死生観については伊藤（2005）を参照。

#### 引用文献

- Aries, P. 1975. *Essais sur l'histoire de la mort en Occident*. =1983 伊藤晃・成瀬駒夫訳『死と歴史——西欧中世から近代へ』みすず書房
- 池周義孝 1992「現代家族と死・墓・葬送」西村洋子・遠藤恵子・島村忠義編『教養の家族社会学』学文社
- 伊藤雅之 2005「スピリチュアリティ研究の射程と応用可能性——生老病死におけるスピリチュアル体験に着目して」『年報 社会科学基礎論研究』4号、ハーベスト社
- 井上順孝 2002「警戒される『宗教』と維持される『宗教性』——7年間にわたる学生への宗教意識アンケート調査から」国際宗教研究所編『現代宗教2002』東京堂出版
- 加藤彰彦 2001「死生観のゆくえ——死と出会う日本社会」大久保孝治編『変容する人生——ライフコースにおける出会いと別れ』コロナ社
- Goerer, G. 1965. *Death, Grief, and Mourning in Contemporary Britain*. =1986 宇都宮輝夫訳『死と悲しみの社会学』ヨルダン社
- 澤井敦 2000「現代日本の死生観と社会構造(上)」『人間関係学研究』（大妻女子大学人間関係学紀要）創刊号：13-29
- 澤井敦 2002「『死のタブー化』再考」『社会学評論』53(1)：118-133
- 野々山久也 1996「家族新時代への胎動——家族社会学のパラダイム転換にむけて」野々山久也・袖井孝子・篠崎正美編『いま家族に何が起きているのか』ミネルヴァ書房
- Berger, P. 1967. *The Sacred Canopy*. =1979 藪田稔訳『聖なる天蓋』新曜社
- 森岡清美 1984「死後観念の変化について——歴史人口学的試み」『日本常民文化紀要』（成城大学大学院文学研究科）10：79-116